

岡崎ホスピスケアを考える会通信

4号

平成12年3月17日

1月の例会報告

「次年度に向けて」

今年度やってきたことを話し合いながら、次年度、何をしたいかを話し合いました。その結果出来上がったのが「次年度の活動計画」です。

まず、「自分の遺言作り」から始めて、「死をどう受け入れるか」を一連の流れで組み立てて見ました。年度末にはこれらをまとめた冊子を完成させたいと思っています。年間計画は、予定の変更があるかもしれません。この通信で、随時お知らせしていきます。

2月の例会報告

「一般病院だからこそできるホスピスケア」

県立愛知病院 安江満悟副院長

残り少なくなってから、ホスピスへ行き、手厚い看護を受けるより、診断、告知、治療と当初からその人の苦しみと悲しみ、恐れ、喜びなどをいつも見守って、共にそばにすることが、患者とその家族にとって、ホスピスケアだということという先生のお話、納得しました。また、ホスピスでなくても、一般病院でも痛みはほぼ100%とれるというお話と、現在痛みはないという患者さんの証言に安堵しました。

3月手縫いの会報告



午前10時少し前から一人二人と紙袋やミシンを持った人が、耳鼻科・外来の診察室横にある看護相談室に集まります。今日は患者さんが治療の処置中にベッドから落ちないように固定するための、大きなベルトを作ることになりました。ミシンの音のそばで、初孫の話、子育てや病気の話をする人、老眼鏡を忘れて糸がなかなか通らない人、送迎をご主人がして下さる人、高校入試の子供を気かけながら手を動かす人。

一枚の雑巾に縫いこまれた気持ちがどうぞ、届きますように・・・・・・

◆報告

- ☆1月26日(水)と2月23日(水)に市民病院のボランティアに延べ6人が参加しました。仕事の内容は、入り口で車椅子の手配・受付のご案内などでした。
- ☆1月27日に萬徳寺・2月1日に浄専寺・3月15日に覚照寺を訪問しました。
- ☆4月から非会員の方の例会参加には参加費として300円頂くことにしました。

◆ご案内

【4月】

手縫いの会：日 時 4月11日(火) 10時～12時 県立愛知病院看護相談室
例 会：日 時 4月21日(金) 10時～12時 岡崎勤労福祉会館
テーマ 「いちど遺言を書いて見ませんか」
講 師 宮道佳男(弁護士)

「ホスピス一般研修会」に参加者募集

4月4日(火)(13時～15時30分)愛知国際病院ホスピス一般研修会に参加者を募集しています。(参加費500円)先着10名までです。ご希望の方は小野さんまで連絡下さい。
電話 0564-24-8518 車2～3台に分乗して行きます。

【5月の例会】

5月27日(土)(時間15:50～16:50)に「死の臨床研究会」の中部支部総会が岡崎公衆衛生センターで行われます。講師は安江満悟先生です。5月の例会はこちらに自主参加ということにします。詳しくは次号でお知らせします。

【来年度の年会費集めます。】

平成12年度の年会費1000円を3月から受け付けます。



2月例会参加しての感想

・いかに生きるか、いかに死ぬかということは、難しく、又とても大切なテーマだと思います。自分らしく毎日楽しくゆとりを持って生きられるそんな人生にできたらと思います。

私の両親はまだ健在ですが、その両親がもし病気になったり、死を迎えるようなことがあればさびしくない最期を迎えられるようにしたいです。やっぱりさびしいのは一番辛いことのように思います。

・本音と立前、先生は本音で話をされるので大変うれしい思いがしました。今後の活躍を期待します。私自身としてはガンになって自分が今後どれだけ生きられるかわからないが、嫁さんに対し、大変感謝の気持ちがいっぱいです。また最近自分自身覚りを開いたような気持ちです。

・今日はありがとうございました。私たちはつい人を頼りがちですが、その前に一步踏みとどまり、自分の生き方と死に方を問い直す必要があると思いました。行政や医療機関に不満を言ったり要求したりする前に、自ら考えたうえで、人と助け合ってゆくことができるのであれば、ホスピスケアは病院の中という「箱」の中だけで行われるものではないということを知ることができると思います。

・今日始めて安江先生のお話を聞きました。今月末愛知病院を主人が退院し、在宅療養になります。少し不安がありましたが、先生のお話を聞きまして気持ちが楽になりました。

昨年10月末に入院、胃がんの告知をされ不安ばかりでしたが、現在安定しているので、在宅療養になりました。ホットしています。愛知病院のスタッフの皆さんとてもいい方でした。

・「医者をもてなす」＝貧しい田舎の老婆には病気になっても医者をもてなすことはできない。呼んでもらえるときは最期の時。自分のために呼んでもらったこの最期の贅沢は、本人への無言の宣告。なんとも胸に迫る話だったが、先生は「最期まで生き切る」と言われた。そして「貧しくても子孫に囲まれ、畳の上で覚悟をして死ぬる死に方、それは考えようによってはこんな幸せな事はない。」とも。私の母は、47年も前に肺結核で亡くなった。しかし、私は病気らしい病気をしたことがない。それだけにいざというとき自分がどんなに取り乱して大騒ぎをするか自信がない。そんな自分を、受け止め支えてくれるような人とかかわりをもつことができると信じて、私はこの会に入っている。そんな日常生活のあり方が死への準備であり、それはまた生き方への問いかけでもあるということはこの会で教えてもらった。安江先生の話は、忘れかけていたものをいつも思い出させてくれる大切なふれあいとなっている。

伝言板

私たちにいつも大きな安らぎを与え続けてくださった安江先生が愛知病院を去られることになりました。私の親友Yさんのご主人がガンを告知されたとき、同席しました。このとき安江先生はY夫婦にこうおっしゃいました。「私もあなたも保証されている命は今だけなんだ、今というこの時を大事にして生きましょう」と。また、入院後は、何も用事がないのにフラフラと現れ、おしゃべりをし、夜帰宅するときは「もう帰るわ」とのぞいてくださったそうです。私はこの「何も用事がないのに」という言葉に深く感銘を受けました。先生がYさんのために作ってくださった二人の時間、先生の愛あふれる思いが、感想でYさんが書いてくださった「本音を話してくださる」「嫁さんに感謝している」「最近自分自身覚りを開いたような気持ちです」という言葉につながったのだと確信しました。

先日安江先生は、「これから僕は、僕自身の死の準備教育をするから見ててよ」とおっしゃいました。今後の先生のご活躍を楽しみにしつつ、続けてご指導いただきたいと願っています。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

橋詰清子

